

文京区こども宅食プロジェクト 2018年度 インパクト・レポート

2019年6月 文京区こども宅食コンソーシアム

1.背景と目的

- 1-1 背景
- 1-2 本レポートの目的

2.事業概要

- 2-1 こども宅食の仕組み
- 2-2 活動実績の概要

3.ロジックモデル、評価指標、測定方法

- 3-1 ロジックモデル
- 3-2 評価範囲・指標
- 3-3 測定方法と測定対象

4.評価結果

- 4-1 評価結果サマリー
- 4-2 評価結果の詳細：利用世帯と支援の妥当性、適切性
- 4-3 評価結果の詳細：アウトプット
- 4-4 評価結果の詳細：初期アウトカム
- 4-5 評価結果の詳細：中期アウトカム

5.課題と事業改善に向けた取り組み

- 5-1 ロジックモデルの改善
- 5-2 評価項目の改善
- 5-3 測定方法の改善
- 5-4 マネジメントの改善および文化醸成
- 5-5 総評

1. 背景と目的

1-1 背景 (1)

2017年から東京都文京区で実施している「こども宅食プロジェクト」には以下に挙げる特徴があります。そのため、事業実施当初から社会的インパクト・マネジメント^(※)の考え方を導入し、

- 1) 事業が生み出す「社会的価値」を「可視化」し、これを「検証」することで、寄付者等への説明責任（アカウンタビリティ）につなげていく
- 2) 評価の実施により実施団体間で戦略と結果を共有し、事業・組織に対する理解を深めるなど組織の運営力の強化や事業活動の改善といった形での評価の活用

を目指しています。

【こども宅食プロジェクトの特徴】

- 類似の事業がなく、新規性の高い事業である
- 事業や組織文化の異なる事業者が連携するコレクティブインパクト型の運営である
- ふるさと納税を主要な財源としている
- 課題を抱える家庭の支援といった、効果が見えづらい、効果が出るのに時間がかかる活動が含まれる

※「社会的インパクト」とは、短期、長期の変化を含め、当該事業や活動の結果として生じた社会的、環境的なアウトカムのことであり、「社会的インパクト・マネジメント」とは、事業運営により得られた事業の社会的な効果や価値に関する情報にもとづいた事業改善や意思決定を行い、社会的インパクトの向上を志向するマネジメントのことを指す。

1-1 背景 (2)

本プロジェクトにおいては、以下のサイクルで社会的インパクト・マネジメントを実施しているが、こども宅食は新規性が高く、類似の事業が存在しなかったこともあり、事業開始前に作成したロジックモデルでは想定される変化、成果を仮説として設定し、事業計画および評価計画を策定した。目標値については事業の実態に合わせて見直しをしていくことを前提とし、下記の①-④のサイクルでの事業運営を行うこととした。

① 計画

事業運営上必要な情報の収集、リサーチを行い、課題の特定と事業目的を設定。ロジックモデルを用いて事業目的を達成する上で重要となる目標、成果を設定し、事業計画および評価計画を策定する。

② 実行

事業の実施と並行して、計画通りのアウトプットが生み出されているかのプロセス管理と評価指標によるモニタリングを実施する。

③ 効果の把握

アンケートや配送時に収集したデータの検証・分析を行い、事業実施により実際に生じた変化、成果を確認する。

④ 報告・活用

分析結果をもとに評価報告書（インパクト・レポート）を作成。今後の事業展開に反映すべき点に関係者間で共有し、より価値を生み出す事業改善のための意思決定に活かす。取り組みの輪を広げていくために、得られた知見を内外に紹介し、今後の評価計画について検討する。

1-2 本レポートの目的

本レポートでは、以下の2点を目的としている。

本プロジェクトにおける社会的インパクト評価のトライアル

当初の計画、仮説をもとに作成したロジックモデル、評価指標、測定方法を活用し、プロジェクトとして初の社会的インパクト評価を実施する。

社会的インパクト・マネジメントを実行する上での課題の見える化

評価結果と併せて測定方法や、事業の進捗などを踏まえ、今後こども宅食コンソーシアムがより精度の高い社会的インパクト・マネジメントを実行し、事業としてのインパクトを高めていく上での課題を明確にする。

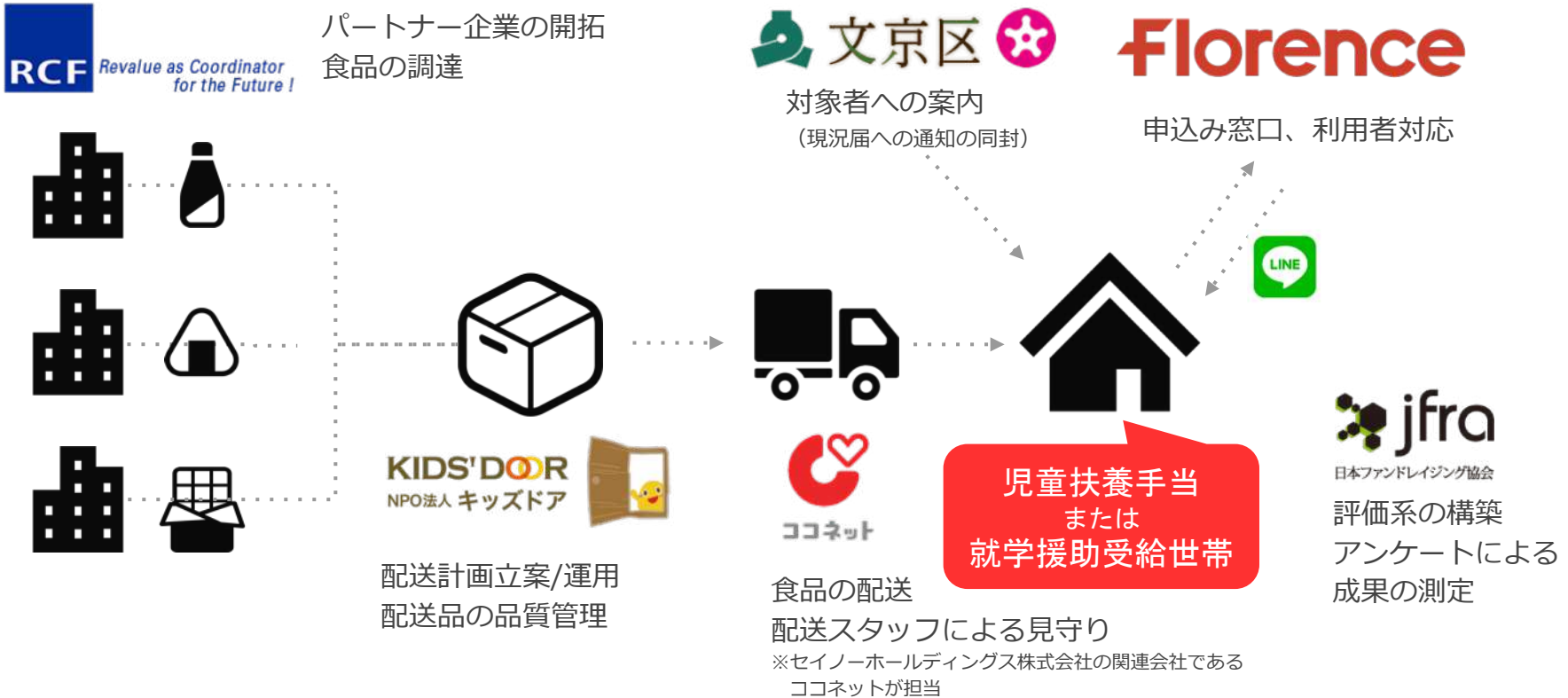
2. 事業概要

2-1 こども宅食の仕組み（1）

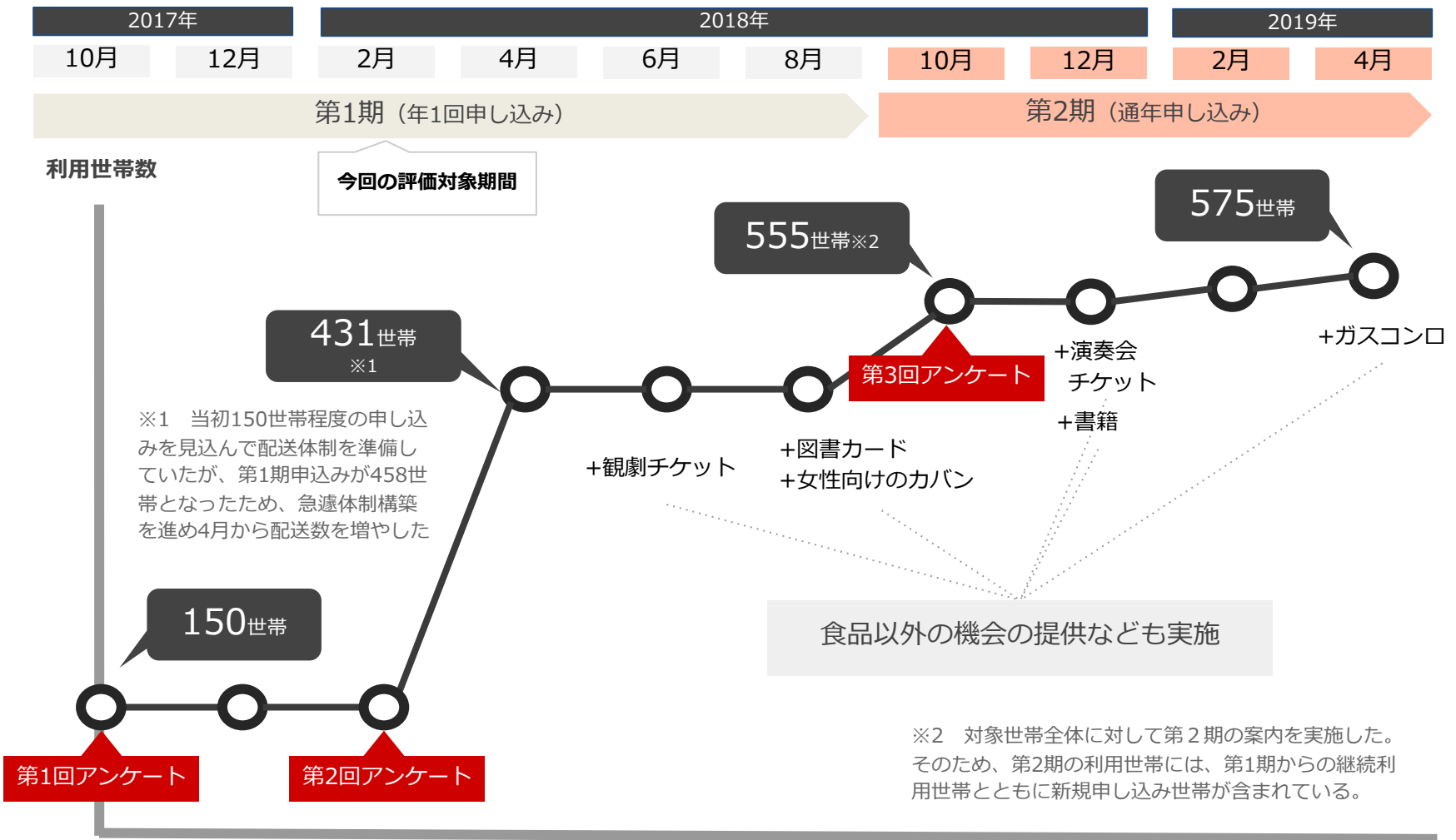
概要	コンソーシアムを形成し、文京区内の経済的に困窮する子育て世帯（児童扶養手当、就学援助受給世帯）のうち、希望者に対して定期的に食品を届けるとともに必要な支援につなげていく。
目的	<ol style="list-style-type: none">1.食品を届けることで利用世帯とつながり、コミュニケーションがとれる関係性を構築する。2.宅食を通じ、利用世帯と適切な社会資源を繋ぐことで高リスク層に移行することを予防する。3.本プロジェクトを模倣可能なモデルにし、オープン化することによって全国に展開する。
対象	文京区内の児童扶養手当または就学援助費の受給世帯（約1,000世帯）
配送開始	2017年10月
配送頻度	2ヶ月に1回
配送食品	お米、レトルト食品など加工食品、調味料、お菓子など
財源	ふるさと納税（こちらの webページ を通じて寄付を募集している）
実施主体	こども宅食コンソーシアム（NPO法人フローレンス、NPO法人キッズドア、NPO法人日本ファンドレイジング協会、一般社団法人RCF、一般財団法人村上財団、セイノーホールディングス株式会社、文京区）

2-1 こども宅食の仕組み (2)

以下のような体制で、団体ごとに役割分担をしてプロジェクトを実施している。



2-2 活動実績の概要



3. ロジックモデル、評価指標、測定方法

3-1 ロジックモデル（1）

ロジックモデルの設計と位置付け

本プロジェクトでは、プロジェクトの計画段階よりロジックモデルを用いて事業目的を達成する上で重要となる目標、成果を設定し、事業計画および評価計画を策定している。社会的インパクト・マネジメントを実施する過程（P.5）でロジックモデルの妥当性を検証し、必要に応じてロジックモデルを改訂し、事業の方向性や改善に向けた意思決定に活かす。

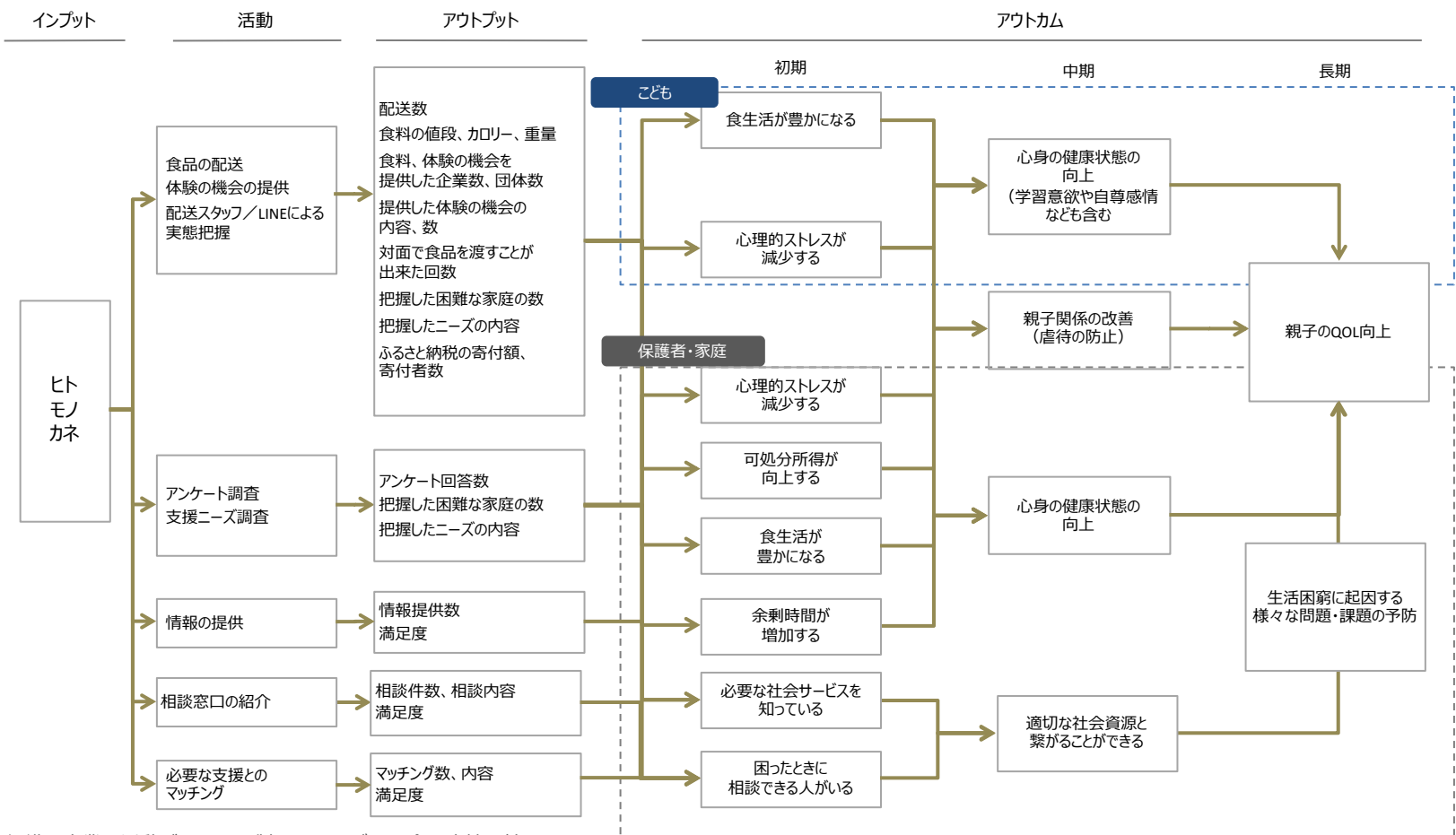
第1期ロジックモデルと第2期ロジックモデル変更のプロセス

前述（P.4-5）の通り、こども宅食は新規性が高く、類似の事業が存在しなかったこともあり、プロジェクト開始前に、事業目的の達成と本プロジェクトで想定される成果を考え合わせて第1期ロジックモデルを作成した。そして第1回（2017年10月）、第2回（2018年2月）のアンケート調査を経て、利用世帯の実態や本プロジェクトが生み出した変化、成果が明確になったことから、アンケート調査結果をもとに第2期（2018年10月）実施前に、第2期ロジックモデルへの改訂を行った。第2期ロジックモデルをもとに、指標、測定方法（第3回アンケート）を策定した。

主な変更点

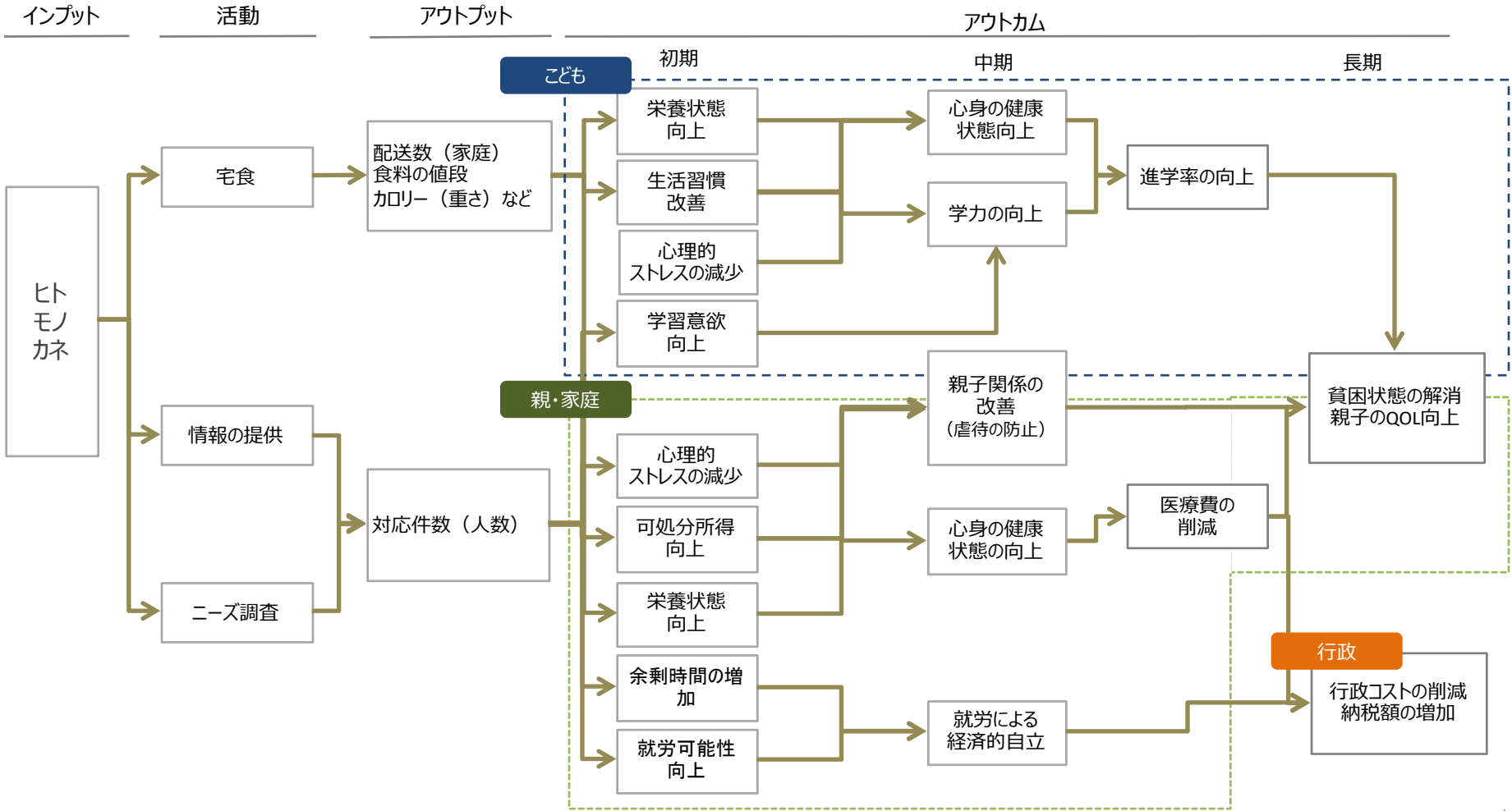
- こども、保護者・家庭両方の初期アウトカムとして当初設定していた「栄養状態向上」の名称については、より変化・成果を適切に表現した「食生活が豊かになる」に変更（指標等に変更なし）。
- 以下のアウトカムは調査の結果、変化が確認できなかったことと、本プロジェクトの成果としての妥当性が低いという判断から第2期より削除。
 - * こどもの初期、中期アウトカム：「生活習慣改善」「学習意欲向上」「学力の向上」「進学率の向上」
 - * 保護者・家庭の初期、中期アウトカム：「就労可能性の向上」「就労による経済的自立」
 - * 行政の長期アウトカム：「行政コストの削減・納税額の増加」

3-1 第2期ロジックモデル（2）



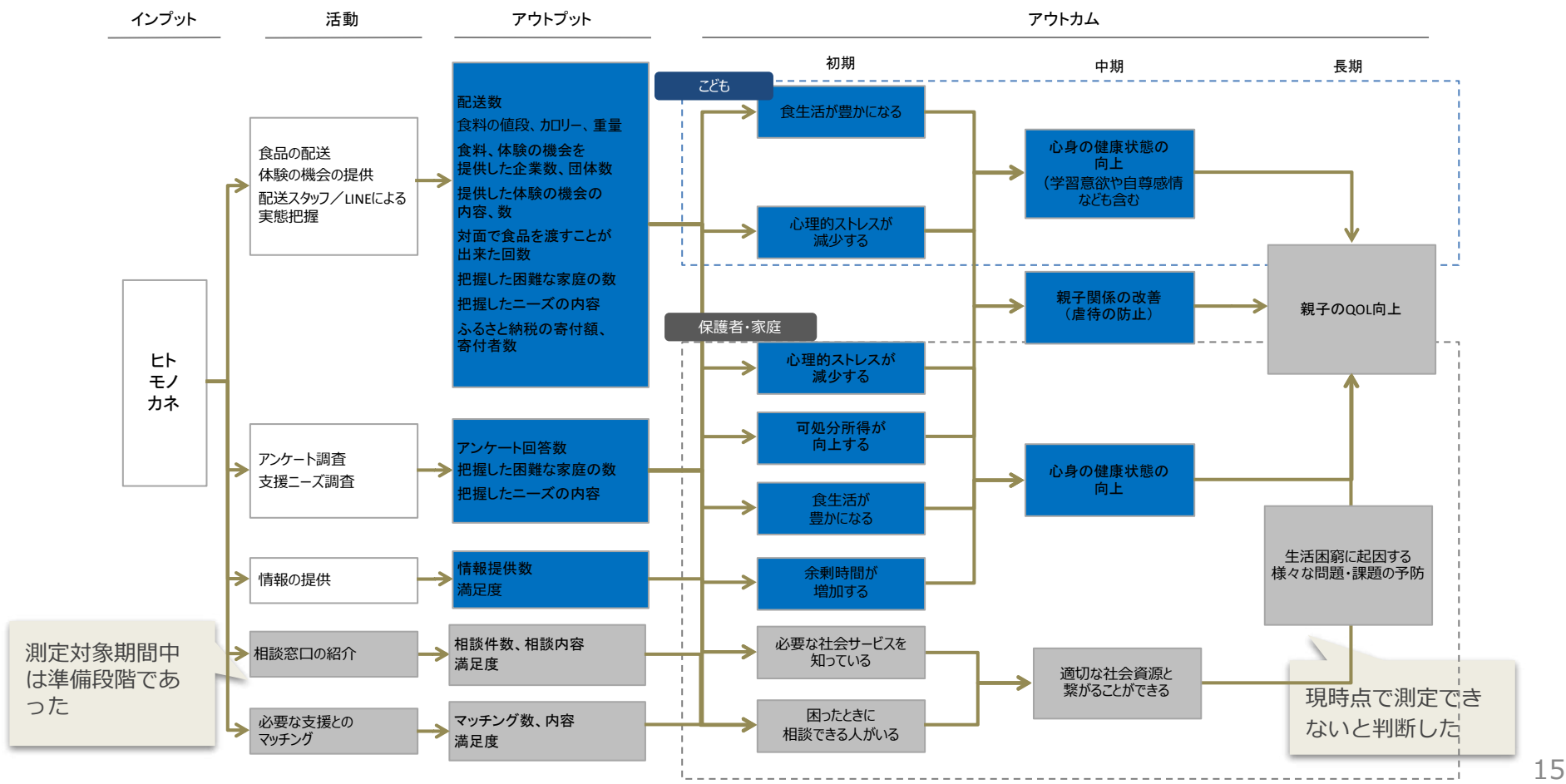
アウトプット：組織や事業の活動がもたらす製品、サービスを含む直接の結果。
 アウトカム：事業や取り組みのアウトプットがもたらす変化、便益。本プロジェクトにおける初期および中期アウトカムとは介入直後からおよそ一年での出現が想定される変化、成果を指す。

【参考】第1期ロジックモデル



3-2 評価範囲・指標 (1)

今回の分析の評価範囲は以下の青色部分である。
 なお、灰色部分は準備段階であった、現時点で測定できないといった理由から評価範囲から除外した項目になる。



3-2 評価範囲・指標 (2)

今回の評価範囲におけるアウトカム、指標、アンケートの設問の関係は以下の表の通り。

ステークホルダー	アウトカムの種類	アウトカム	指標	設問内容	
子ども	初期アウトカム	食生活が豊かになる	食事内容の改善	子ども宅食の利用前と比較して、食事内容は変わりましたか。	
			食事頻度／朝食の欠食率	お子さんは朝食を食べますか。	
	中期アウトカム	心身の健康状態の向上	精神的ストレスが減少する	精神状態の改善*	子ども宅食の利用前と比較して、お子さんの態度に変化はありましたか。
			健康状態の改善	精神状態の改善*	お子さんの現在の健康状態はどうですか。 子ども宅食の利用前と比較して、お子さんの健康状態に変化はありましたか。
保護者・家庭	初期アウトカム	心理的ストレスの減少	精神状態の改善*	K6指標**【設問内容は第3回アンケート（新規世帯）問22を参照】 子ども宅食の支援を受ける前と比較して、あなたの気持ちの変化はありましたか。	
			可処分所得が向上する	節約できた金額／追加で出来たこと	子ども宅食の利用前と比較して、一か月に節約できた金額（食費や買い物に行く交通費など）を教えてください。
		食生活が豊かになる	食事頻度／朝食の欠食率	あなたは、一日3食を食べますか。 あなたは朝食を食べますか。	
			食事内容の改善	子ども宅食の利用前と比較して、食事内容は変わりましたか。	
			余剰時間の増加	節約できた時間／追加で出来たこと	子ども宅食の利用前と比較して、これまで買い物に使っていた時間など、一か月のあいだに増えた自由な時間はどれくらいになりますか。
	中期アウトカム	親子関係の改善	親子関係の変化	あなたのご家庭では、お子さんと次のようなことをすることがありますか。	
			家族との関係	子ども宅食の支援を受ける前と比較して、あなたと家族（子どもやパートナーなど）の関係に変化はありましたか？	
		心身の健康状態の向上	健康状態の改善	子ども宅食の利用前と比較して、あなたの健康状態に変化はありましたか。	
			精神状態の改善*	K6指標**【設問内容は第3回アンケート（新規世帯）問22を参照】 子ども宅食の支援を受ける前と比較して、あなたの気持ちの変化はありましたか。	

* 「精神状態の改善」は介入直後から一年程度にわたり出現すると想定されたため、初期、中期アウトカムの指標として設定しており、同一の設問内容を設定している。
** P.33を参照。

3-3 測定方法と測定対象

本レポートの評価測定は利用世帯のアンケート結果をもとに行なった。使用したアンケートの詳細は以下の通り。

測定方法	2018年10月度の食品配送（第2期の初回配送）前に、自記入式の紙の第3回アンケートを郵送し、回答、返送を依頼
評価対象期間	2017年10月（第1期の初回配送）～2018年9月（第2期の初回配送前）
実施期間	2018年9月19日から10月12日まで（第3回アンケート）
調査対象*	218世帯
回収数**	157世帯
回収率	72.0%
外部協力者	阿部 彩氏（本プロジェクトアドバイザー/首都大学東京 人文社会学部人間社会学科 教授 兼 子ども・若者貧困研究センター長） 新藤 健太氏（群馬医療福祉大学 社会福祉学部 助教）

*第1期からの利用世帯。第3回アンケートは基本情報、支援ニーズや生活課題を把握するための設問も含んでいたため、配付数は第2期からの利用世帯（388世帯）も含め、計606世帯。

**第2期からの利用世帯も含めた回収数は417世帯

4. 評価結果

4-1 評価結果サマリー (1)

支援の妥当性、 適切性

精緻に対象者の困難な状況や支援ニーズを明らかにできたことで、利用世帯と支援の妥当性、適切性を確認することができた。

アウトプット

設定した指標については、全て測定することができた。

初期アウトカム

こども、保護者・家庭で設定した6つのアウトカムについては、全てのアウトカムでポジティブな変化が見られた（一部限定的）。

そのうち、最も顕著な変化があったのは、保護者・家庭の「心理的ストレスの減少」と「可処分所得が向上する*」であり、宅食の支援の成果が確認された。

中期アウトカム

こども、保護者・家庭で設定した3つのアウトカムについては、全てのアウトカムでポジティブな変化が見られた（一部限定的）。

ただし、介入後に変化がおこるまでに時間がかかる指標も多いことから「変化が見られない」項目もあり、現時点での変化は限定的であると考えられる。

*本稿では食費負担の軽減をもって可処分所得の向上と評価している（詳細はP.36を参照）

4-1 評価結果サマリー (2)

指標ごとに設定した設問のうち、変化が見られたのは赤色とピンク色の指標、設問であった。

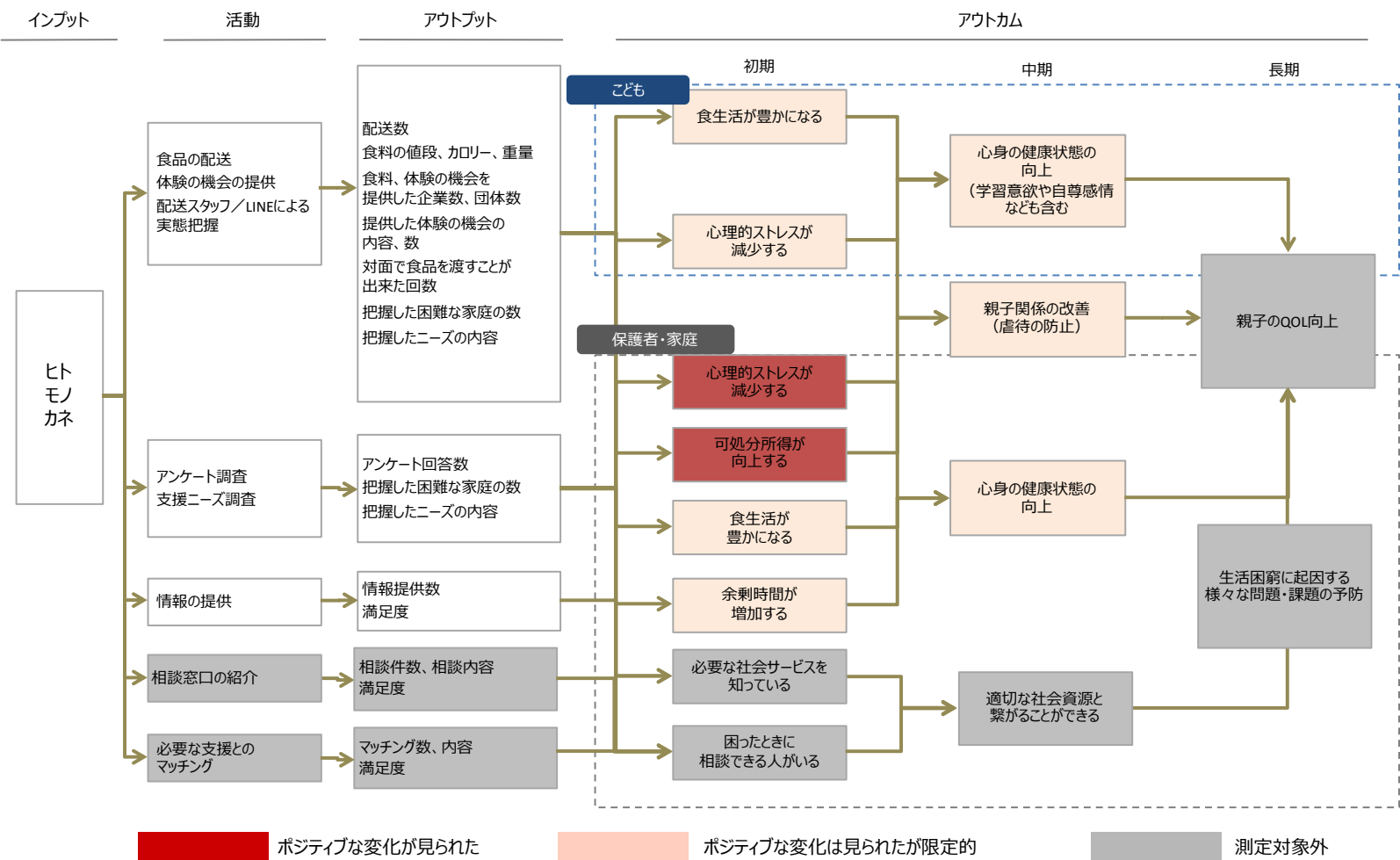
ステークホルダー	アウトカムの種類	アウトカム	指標	設問内容	結果
こども	初期アウトカム	食生活が豊かになる	食事内容の改善	こども宅食の利用前と比較して、食事内容は変わりましたか。	変化あり
			食事頻度/朝食の欠食率	お子さんは朝食を食べますか。	変化なし
		心理的ストレスが減少する	精神状態の改善*	こども宅食の利用前と比較して、お子さんの態度に変化はありましたか。	変化あり (限定的)
	中期アウトカム	心身の健康状態の向上	健康状態の改善	お子さんの現在の健康状態はどうか。	変化なし
			精神状態の改善*	こども宅食の利用前と比較して、お子さんの健康状態に変化はありましたか。	変化あり (限定的)
			精神状態の改善*	こども宅食の利用前と比較して、お子さんの態度に変化はありましたか。	変化あり (限定的)
保護者・家庭	初期アウトカム	心理的ストレスの減少	精神状態の改善*	K6指標**【設問内容は第3回アンケート(新規世帯)問22を参照】 こども宅食の支援を受ける前と比較して、あなたの気持ちの変化はありましたか。	変化あり
			可処分所得が向上する	節約できた金額/追加で出来たこと	こども宅食の利用前と比較して、一か月に節約できた金額(食費や買い物に行く交通費など)を教えてください。
		食生活が豊かになる	食事頻度/朝食の欠食率	あなたは、一日3食を食べますか。	変化なし
			食事頻度/朝食の欠食率	あなたは朝食を食べますか。	変化なし
			食事内容の改善	こども宅食の利用前と比較して、食事内容は変わりましたか。	変化あり
	余剰時間の増加	節約できた時間/追加で出来たこと	こども宅食の利用前と比較して、これまで買い物に使っていた時間など、一か月のあいだに増えた自由な時間はどれくらいになりますか。	変化あり (限定的)	
	中期アウトカム	親子関係の改善	親子関係の変化	あなたのご家庭では、お子さんと次のようなことをすることがありますか。	変化なし
			家族との関係	こども宅食の支援を受ける前と比較して、あなたと家族(こどもやパートナーなど)の関係に変化はありましたか？	変化あり (限定的)
		心身の健康状態の向上	健康状態の改善	こども宅食の利用前と比較して、あなたの健康状態に変化はありましたか。	変化なし
			精神状態の改善*	K6指標**【設問内容は第3回アンケート(新規世帯)問22を参照】 こども宅食の支援を受ける前と比較して、あなたの気持ちの変化はありましたか。	変化あり
精神状態の改善*			こども宅食の支援を受ける前と比較して、あなたの気持ちの変化はありましたか。	変化あり	

ポジティブな変化あり (50%以上)
 ポジティブな変化は見られたが限定的 (50%未満)
 変化なし

* 「精神状態の改善」は介入直後から一年程度にわたり出現すると想定されたため、初期、中期アウトカムの指標として設定しており、同一の設問内容を設定している。 20
 ** P.33を参照。

4-1 評価結果サマリー (3)

ロジックモデル上で設定したアウトカムのうち、ポジティブな変化が見られたのは、赤色、ピンク色のアウトカムであった。

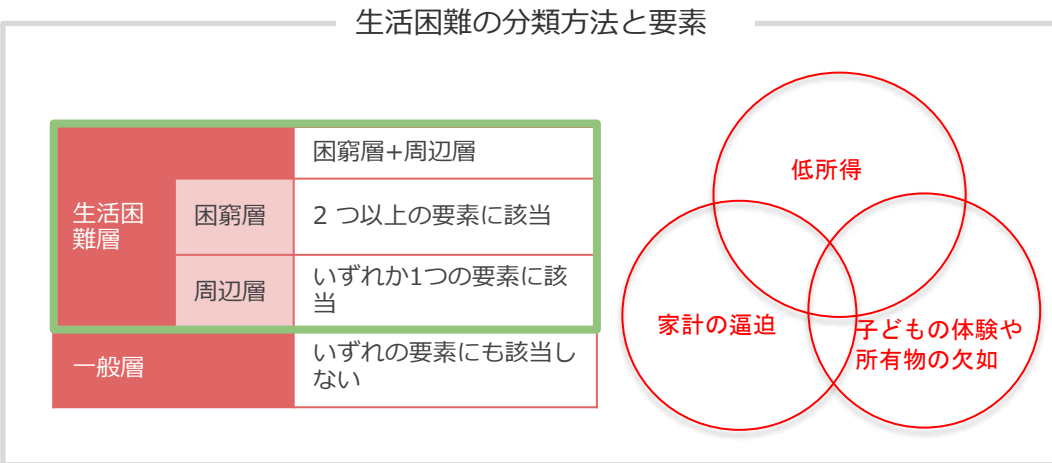


4-2 評価結果の詳細 : 利用世帯と支援の妥当性、適切性 (1)

こども宅食を利用する家庭の生活困難度はどうか

宅食利用世帯の困難度を多角的に検証するため、第3回アンケート調査に回答した全417世帯のデータを ①低所得、②家計の逼迫、③子供の体験や所有物の欠如の3つの要素に基づき、以下の3つに分類した。その結果、利用世帯の約55%（未回答などの欠損値を除くと約60%）が生活困難層に該当した。

なお本プロジェクトの利用世帯の子どもは18歳未満の全年齢であるため、厳密な比較はできないが、本分類を用いてなされた「東京都子供の生活実態調査」*（2017年、以下、東京都調査）との比較からも、利用世帯は実際に厳しい生活状況にあることが分かる。本プロジェクトの対象者は、児童扶養手当または就学援助の受給世帯という制度上の分類で選定しているが、調査結果からより精緻に利用世帯の困難な状況を明らかにできたことで、利用世帯と支援の妥当性、適切性を確認することができた。

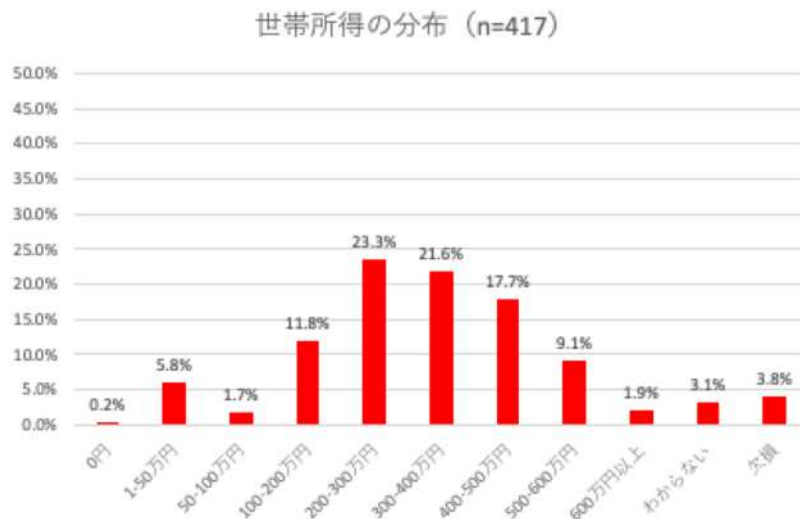


* 東京都子供の生活実態調査

4-2 評価結果の詳細:利用世帯と支援の妥当性、適切性 (2)

生活困難度の詳細①：低所得基準に該当する世帯の数

こども宅食の利用世帯を東京都調査で用いられている低所得*基準にて分類してみると、利用世帯の27%が低所得基準に該当し、「収入がない」も含め、100万円未満と答えた世帯が約7%いるなど経済的に厳しい状況がうかがえる。



*等価世帯所得**が厚生労働省「平成29年国民生活基礎調査」から算出される<基準> (下記参照) 未満の世帯を低所得としている。

**等価世帯所得(公的年金など社会保障給付を含めた世帯所得)を世帯人数の平方根で割って調整した所得

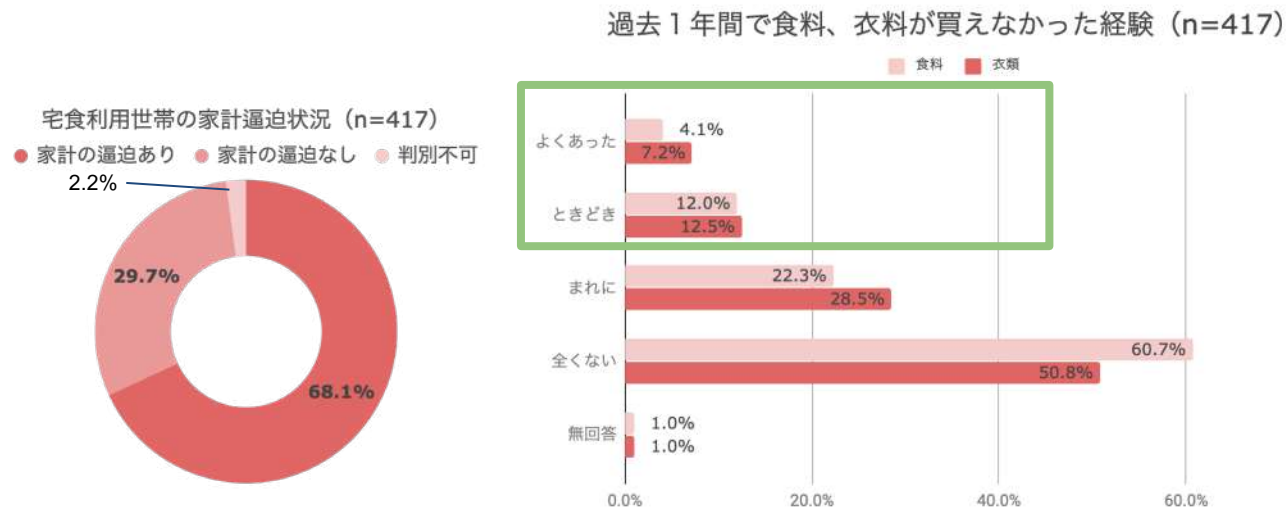
<基準>

世帯所得の中央値 (442万円) ÷ 平均世帯人数(2.47人)×50%=140.6万円 (首都大学東京 阿部教授算出)

4-2 評価結果の詳細：利用世帯と支援の妥当性、適切性（3）

生活困難度の詳細②：家計の逼迫

- 過去1年間で、経済的な理由で公共料金（電話、電気、ガス、水道、家賃）が支払えないこと、食料、衣服が買えない経験があった世帯（家計の逼迫あり）は約30%に上る。
- 16.1%が食料が買えなかった経験、19.7%が衣類が買えなかった経験がある（「よくあった」、「ときどき」の合計）。
- 公共料金を各項目別に見ると、電気（11.7%）、その他の債務（12.9%）が支払えなかった割合が高い。



過去1年間で公共料金が支払えないことがあった経験のある人の割合

電話	9.8%
電気	11.7%
ガス	8.6%
水道	8.8%
家賃	8.8%
住宅ローン*	2.2%
その他債務*	12.9%

家計の逼迫：「経済的な理由で公共料金や家賃の支払えなかった経験」、
「食料・衣類を買えなかった経験」など7項目のうち、1つ以上該当する世帯

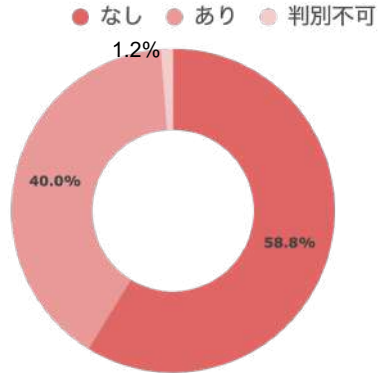
*家計の逼迫の指標には含まれていない。

4-2 評価結果の詳細：利用世帯と支援の妥当性、適切性（4）

生活困難度の詳細③：子どもの体験や所有物の欠如

- 経済的な理由により、利用世帯の40%に、子どもの体験や所有物に欠如がある。
- 体験（項目1~5）においては「遊園地やテーマパークに行く」が「ない」世帯が最も多く、20.4%に上る。
- 経済的にできない子どものための支出（項目6~12）においては「学習塾に通わせる」「1年に1回程度家族旅行に行く」ことができない世帯が多い。
- 所有物（項目13~15）においては「子どもが自宅で宿題をすることができる場所」が「ない」世帯が最も多く、17%に上る。

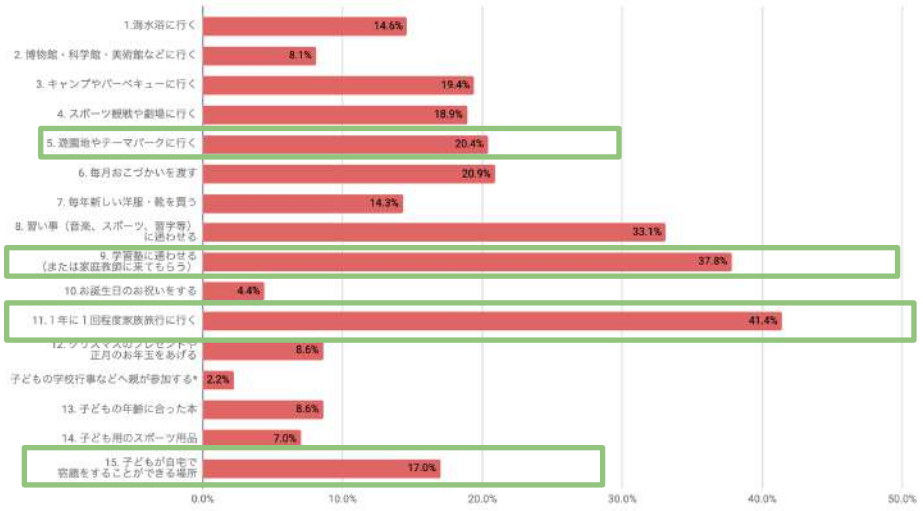
子どもの体験や所有物の欠如の有無 (n=417)



アンケートの自由記述より抜粋

「借家で狭く、子供の勉強スペースがしっかりとれていない」
 「子供達の習い事等の費用が足りずこまっている。」

経済的な理由により「ない」、「できない」と回答した割合* (n=417)



*全回答世帯数 (n=417) から「適用年齢ではない」の回答数を除いた上で集計したもの

子供の体験や所有物の欠如：上記の横棒グラフの項目のうち、「子どもの学校行事などへ親が参加する」を除いた子供の体験や所有物などの15項目のうち、

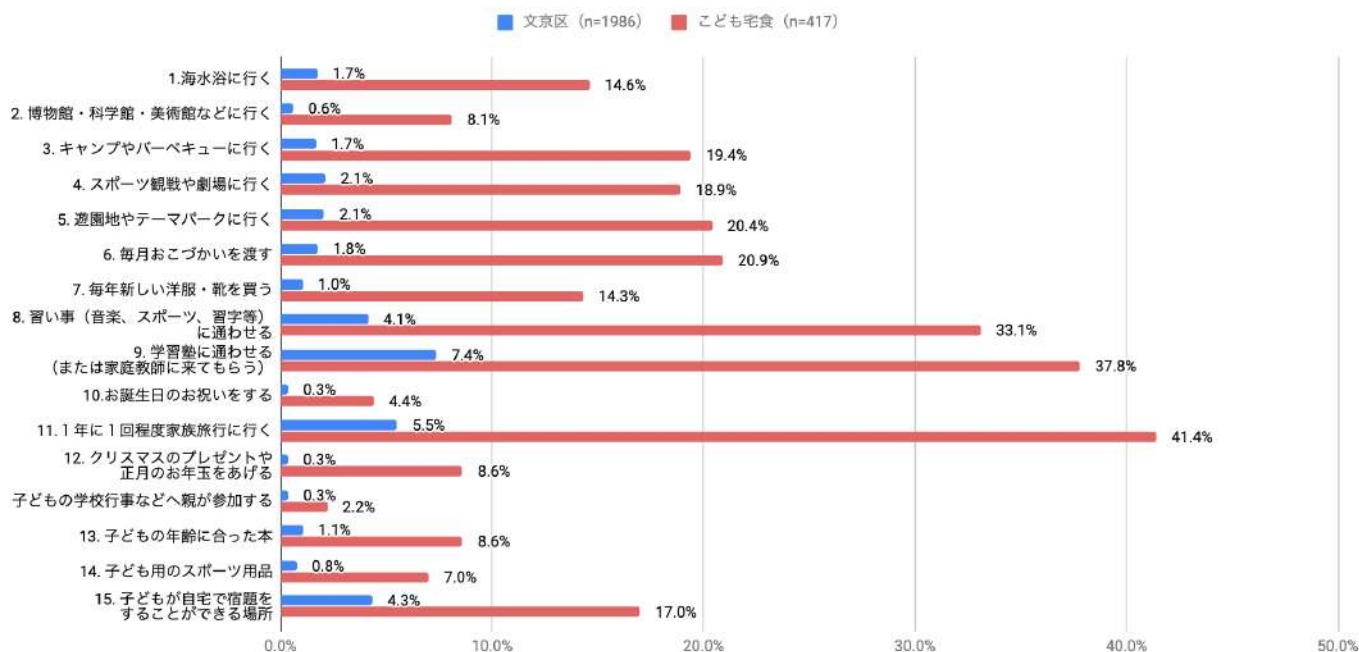
経済的な理由で欠如している項目が3つ以上該当する世帯

4-2 評価結果の詳細：利用世帯と支援の妥当性、適切性（5）

生活困難度の詳細③：子どもの体験や所有物の欠如（文京区世帯調査との比較）

文京区では、「子育て支援に関するニーズ調査」において、区内に居住する子育て世帯に対し、前述の子どもの体験や所有物の欠如の指標に関する調査を行っている。就学前から中学生の子どもを持つ世帯の数値をこども宅食利用世帯と比較すると、利用世帯の欠如の割合はかなり高いことがわかり、困窮している世帯に支援を届けられていることがわかる。

経済的な理由により「ない」、「できない」と回答した割合



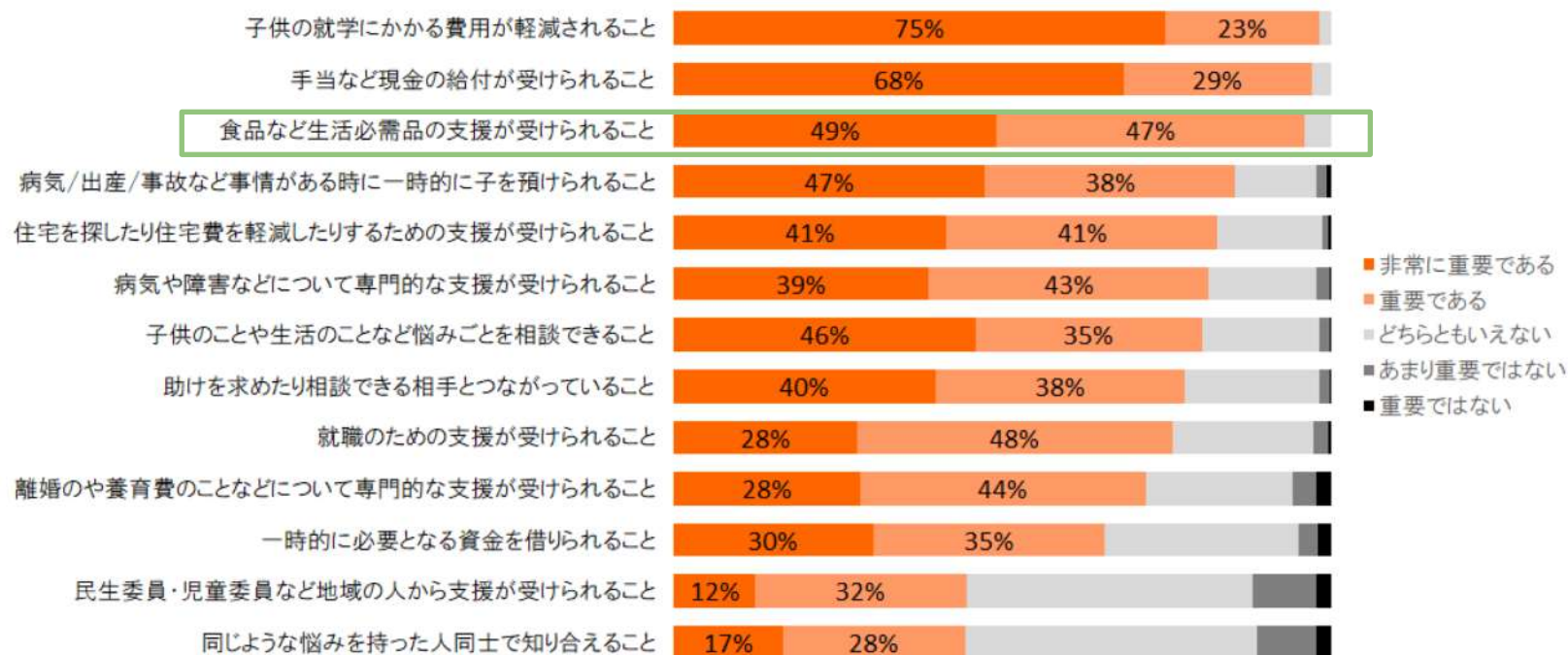
文京区の数値の算出方法について：「平成30年度文京区子育て支援に関するニーズ調査報告書」にて回答した就学前、小学生、中学生の数値の合計を回答者数で割ったもの。

4-2 評価結果の詳細：利用世帯と支援の妥当性、適切性（6）

利用世帯の支援ニーズに対応しているか

食品など生活必需品の支援は、直接的な経済的支援の次にニーズが高いため、宅食の支援は利用世帯のニーズに合致している。

以下の支援はどの程度重要だと思いますか。（n=361*）



*第3回のアンケートに回答した第1期からの利用世帯（第2期解約世帯は除く）と、第2期新規利用世帯

4-3 評価結果の詳細：アウトプット

設定した指標については、全て測定することができた。

指標	測定値
配送世帯数（2018年8月時点）	419世帯
延べ配送世帯数（2017年10月～2018年8月までの配送世帯数の合計）	1,716 世帯
配送手渡し率（平均）	54%
配送食品の重量（一世帯当たり、平均）	7.2kg
配送食品のカロリー（一世帯当たり、平均）	7,700 kcal
配送食品の換算額（一世帯当たり、平均）	6,100 円
把握した困難な家庭の数*	40 世帯
食品等の寄付、体験の機会を提供している企業、団体、個人数	2017年：19、2018年：40
提供した体験の機会の内容	観劇、演奏会
アンケート回収数（回収率）	第1回：202（87.4%） 第2回：151（66.8%） 第3回**：157（72%）

*第2期の新規世帯で該当する家庭も含めた数。こども宅食独自の指標である、①家計の状況、②生活困難の状況、③「病気・病歴・障害・介護」の有無、④ こどもの体験機会の欠如、⑤精神的なストレスの度合い、⑥相談相手の有無、の内で3個以上に該当している世帯で、生活困難度が悪化するリスクが高いと判断した家庭を指す。

** 新規世帯を含めた回収数は417（68.8%）

4-4 評価結果の詳細：初期・中期アウトカム 結果一覧

設定したアウトカムのうち、「可処分所得の向上」と「親の心理的ストレスの減少」については影響を与えた利用世帯が多かった。

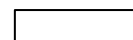
アウトカムの種類	アウトカム	指標	ステークホルダー	結果	詳細ページ
初期アウトカム	食生活が豊かになる	食事内容の改善	保護者・子ども	食事内容にはポジティブな変化が見られ、特に「間食ができるようになった」を挙げる人が最も多く、宅食による支援の成果といえる。	P.30
		食事頻度／朝食の欠食率	保護者・子ども	朝食の欠食率、食事頻度には変化は見られなかった。これは、利用世帯ではもともと朝食の欠食率や食事頻度に問題がなかったことが大きな要因だと考える。	P.31
	心理的ストレスが減少する	精神状態の改善*	保護者	・保護者の気持ちにはポジティブな変化が見られ、特に「気持ち豊かになった」「社会とのつながりが感じられるようになった」を挙げる人が多く、宅食の支援の成果といえる。 ・抑うつ傾向がある保護者の一部（35%）に1年後に抑うつ傾向の改善が見られ、宅食の支援が寄与していると推察される。	P.32-33
			子ども	限定的ではあるがポジティブな変化が見られ、特に「笑顔が増えた」「会話が増えた」を挙げる人が多く、宅食の支援の成果といえる。	P.34
	可処分所得が向上する	節約できた金額／追加で出来たこと	保護者	・1ヶ月に節約できた金額の平均は3,760円であり、食費の負担減に向上に貢献したといえる。 ・節約できた金額は他の食品や生活必需品に充てている。	P.35-36
	余剰時間の増加	節約できた時間／追加で出来たこと	保護者	・1ヶ月で増えた自由な時間は平均で25分あり、宅食の支援が余剰時間の増加に一定程度貢献したといえる。 ・「増加した」と回答した人のほとんどが、その時間を「子どもと過ごす時間」に使っている。	P.37-38
中期アウトカム	心身の健康状態の向上	健康状態の改善	子ども	子どもの健康状態は、もともと問題がないことが要因で、全体としては変化は見られなかったが、詳細を見ると「空腹を感じる事が少なくなった」等、宅食の支援の成果が限定的ながら確認された。	P.39
		精神状態の改善*		精神状態は初期より変化が確認されている子どもの態度から、限定的ではあるがポジティブな変化が見られる（P.34再掲）。	P.40
	健康状態の改善	保護者	健康面の変化においては「疲労感が減った」という人が最も多かったが、限定的な変化であった。	P.41	
	精神状態の改善*		精神面においては初期より変化がみられた（P.32-33参照）。	P.41	
	親子関係の改善	親子関係の変化	保護者	親子関係の改善は、親子で過ごす時間の分析からは確認されなかった。	P.42
家族との関係		保護者	宅食利用前と比較して「家族との関係」が良くなったと回答したのは40%で親の気持ち、子どもの態度の変化が影響していると考えられる。	P.43	



ポジティブな変化あり（50%以上）



ポジティブな変化は見られたが限定的（50%未満）



変化なし

*「精神状態の改善」は介入直後から一年程度にわたり出現すると想定されたため、初期、中期アウトカムの指標として設定しており、同一の設問内容を設定している。29

4-4 評価結果の詳細：初期アウトカム（1） 食生活が豊かになる

食事内容にはポジティブな変化が見られ、特に「間食ができるようになった」を挙げる人が最も多く、宅食による支援の成果といえる。

食事内容の改善

保護者

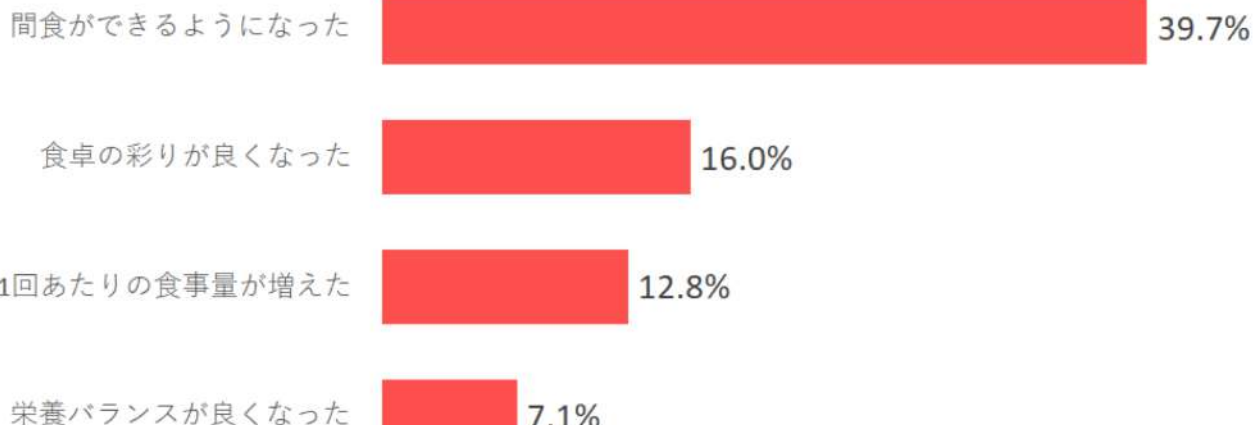
子ども

こども宅食の利用前と比較して、食事内容は変わりましたか。



変化あり
63%

(n=156)



(n=156 複数回答)

会社にスープやドリンクが持って行けて、おやつがたべれた。

パスタやお米等の主食をいただけるので、おかずを充実させることができました。

4-4 評価結果の詳細：初期アウトカム（2） 食生活が豊かになる

朝食の欠食率、食事頻度は変化がなかった世帯が大多数であった。これは、利用世帯ではもともと朝食の欠食率や食事頻度に問題がなかったことが大きな要因だと考える。

朝食の欠食率

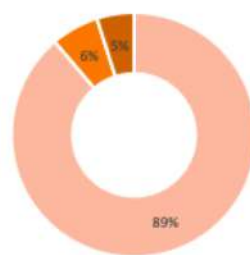
保護者

子ども

子ども/あなたは朝食を食べますか
(1.毎日食べる 2.ときどき食べる 3.ほとんど食べない 4.全く食べない)

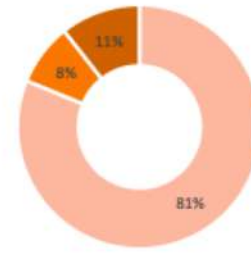
- ・介入前（第1回時点）で、子どもは89%、母親は66%が朝食を「1. 毎日食べる」と回答。

子どもの朝食の摂取状況の変化
(第1回+第2回結合データ、n=143)



●変化なし ●減少 ●増加

母親の朝食の摂取状況の変化
(第1回+第2回結合データ、n=85)



●変化なし ●減少 ●増加

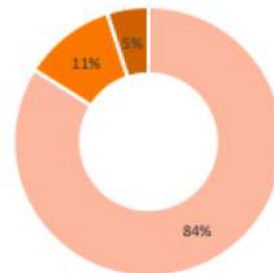
食事頻度

保護者

あなたは一日3食食べていますか
(1.ほぼ毎日3食 2.ほぼ毎日2食 3.ほぼ毎日1食 4.ほぼ食べない)

- ・介入前（第1回時点）で、68%が「1. ほぼ毎日3食」と回答。

母親の食事頻度の変化
(第1回+第2回結合データ、n=81)



●変化なし ●減少 ●増加

*第1回と第3回結合データの統計分析においても変化は確認できなかった。

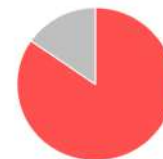
4-4 評価結果の詳細：初期アウトカム（3） 心理的ストレスが減少する

保護者の気持ちにはポジティブな変化が見られ、特に「気持ちが豊かになった」「社会とのつながりが感じられるようになった」を挙げる人が多く、こども宅食の支援の成果といえる。

精神状態の改善

保護者

こども宅食の支援を受ける前と比較して、あなたの気持ちの変化はありましたか。



変化あり

85%

(n=156)



経済的に助かり、少し安心できた。

人に対する感謝の気持ちが強くなった

お米を買うかわりにパンや小さなケーキを買った。少し余裕ができてうれしかった。

4-4 評価結果の詳細：初期アウトカム（4） 心理的ストレスが減少する

抑うつ傾向がある保護者の一部（35%）に1年後に抑うつ傾向の改善が見られ、こども宅食の支援が寄与していると推察される。

精神状態の改善

保護者

K6指標

第1回と第3回の結合データ（n=84）において、第1回アンケートにて抑うつ傾向にあった20人のうち、35%（7人）の抑うつ傾向が改善された。

K6指標による抑うつ傾向のある保護者の前後比較

			K6得点（第3回アンケート）	
			非うつ （9点以下）	うつ （9点以上）
K6得点 （第1回アンケート）	非うつ （9点以下）	度数	52	12
		%	81.3%	18.8%
	うつ （9点以上）	度数	7	13
		%	35.0%	65.0%
合計	度数	59	25	
	%	70.2%	29.8%	

- 第1回と第2回の結合データ（n=133）において、こども宅食利用制世帯と非利用世帯の保護者に分けて抑うつ傾向の分析を行った結果においても、利用世帯は改善した人が多かった（詳細は[「こども宅食プロジェクトアンケート調査分析報告書」](#)のP.26-27を参照）。

K6指標：米国のKesslerらによって、うつ病・不安障害などの精神疾患をスクリーニングすることを目的として開発され、一般住民を対象とした調査で心理的ストレスを含む何からの精神的な問題の程度を表す指標として広く利用されている。日本語版の指標は本プロジェクトのアンケート票もしくは[こちら](#)を参照のこと。

4-4 評価結果の詳細：初期アウトカム（5） 心理的ストレスが改善する

子どもの態度には、限定的ではあるがポジティブな変化が見られ、特に「笑顔が増えた」「会話が增进了」を挙げる人が多く、こども宅食の支援の成果といえる。

精神状態の改善

こども

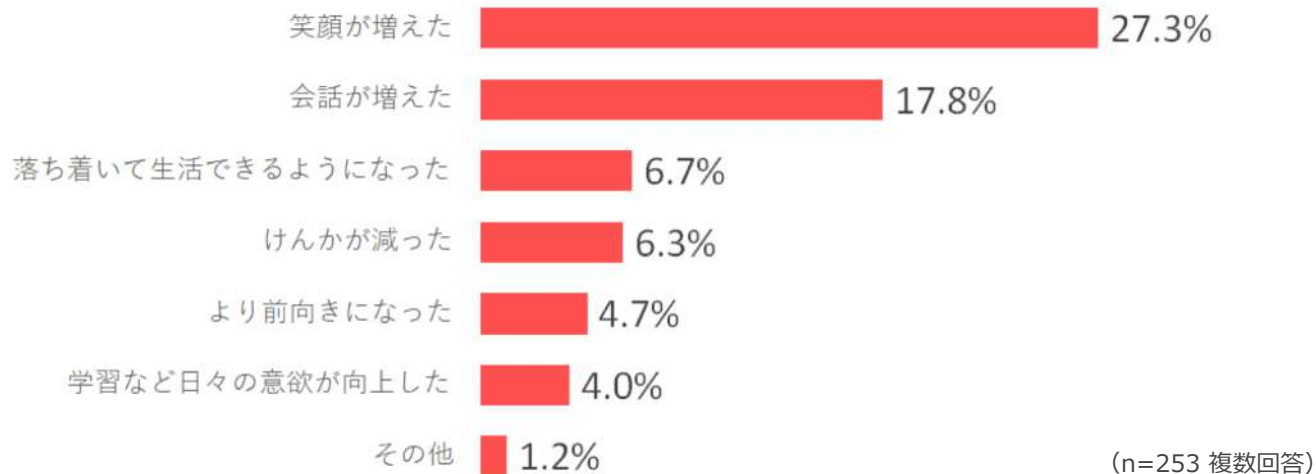
こども宅食の利用前と比較して、お子さんの態度に変化はありましたか。



変化あり

45%

(n=253*)



こども宅食でいただいたものについて、家族で話をした。
『これ、おいしいね』『どんなところが寄付してくださっているのか?』など、会話が增进了。

*子どもの数

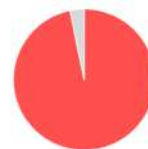
4-4 評価結果の詳細：初期アウトカム（6） 可処分所得が向上する

1ヶ月に節約できた金額の平均は3,620円であり、食費の負担軽減に貢献したといえる。

節約できた金額

保護者

こども宅食の利用前と比較して、一か月に節約できた金額（食費や買い物に行く交通費など）を教えてください。



節約できた世帯
96%

(n=137)

平均 3,620円

69.3%



1円以上-5千円未満

19.7%



5千円以上-1万円未満

7.3%



1万円以上-2.5万円未満

(n=137 金額は自由記述)

節約できた金額は他の食品や生活必需品に充てている。

追加でできたこと

保護者

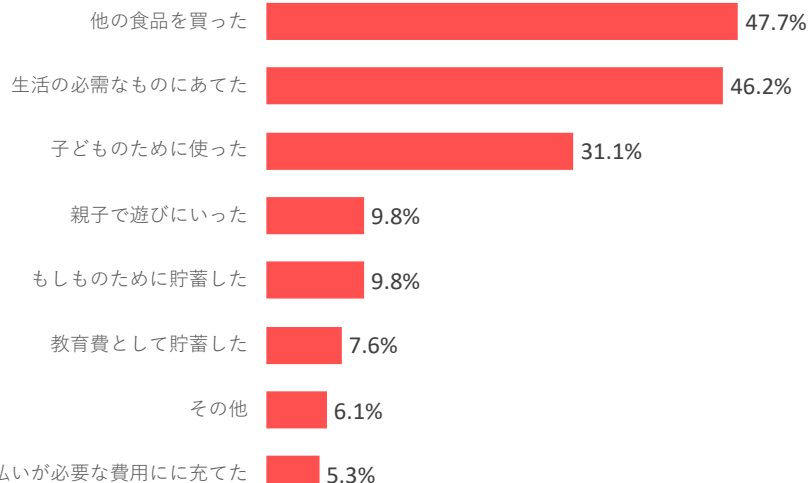
節約したお金でどのようなことができましたか。



節約できた世帯

96%

(n=137)



(n= 132 : 1円以上節約できたと回答した人の数 複数回答)

おかしを買ってあげた。
新しいノートを買ってあげた。

節約をして子供がよろこぶ
ところに遊びに行った。

高校受験の年だったので
塾の冬期講習に申し込んだ。

4-4 評価結果の詳細：初期アウトカム（8） 余剰時間の増加

増えた自由な時間は平均で25分あり、こども宅食の支援が余剰時間の増加に一定程度貢献したといえる。

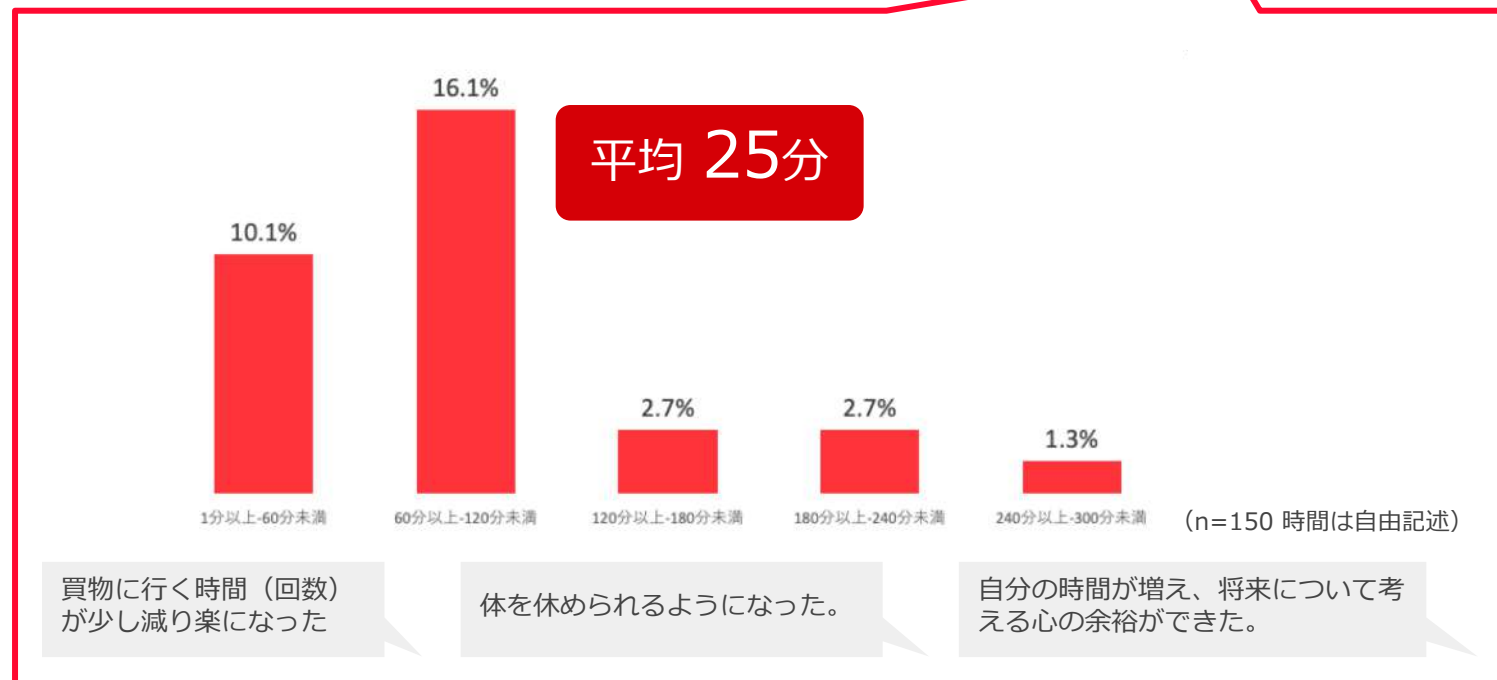
節約できた時間

保護者

こども宅食の利用前と比較して、これまで買い物に使っていた時間など、一か月のあいだに増えた自由な時間はどれくらいになりますか。



節約できた世帯
33%
(n=150)



4-4 評価結果の詳細：初期アウトカム（9） 余剰時間が増加する

余剰時間が「増加した」と回答した人のほとんどが、その時間を「子どもと過ごす時間」に使っている。

追加でできたこと

保護者

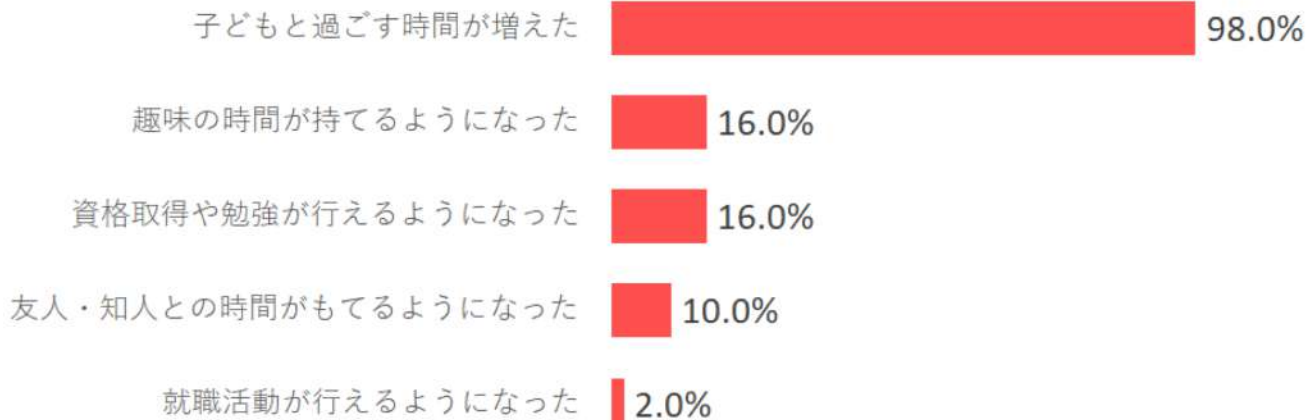
その時間を利用して、何かしたことはありますか。



節約できた世帯

33%

(n=150)



(n=50: 1分以上増加したと回答した人数 複数回答)

4-5 評価結果の詳細：中期アウトカム（1） 心身の健康状態の向上

子どもの健康状態は、もともと問題がないことが要因で、全体としては変化は見られなかったが、詳細を見ると「空腹を感じるようになった」等、こども宅食の支援の成果が限定的ながら確認された。

健康状態の改善

こども

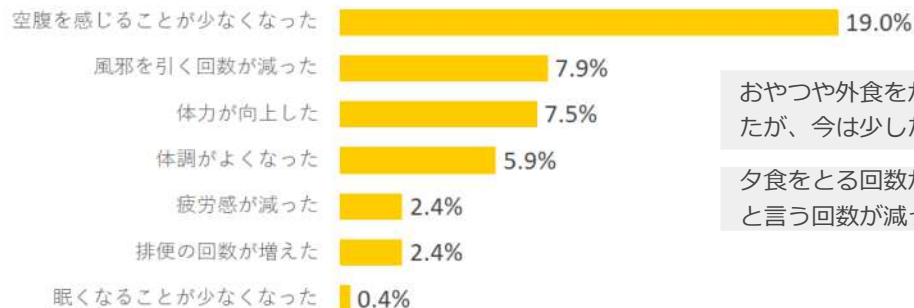
お子さんの現在の健康状態はどうか
(1. よい 2. まあよい 3. ふつう 4. あまりよくない 5. よくない)

- ・介入前（第1回時点）で、74%が「1.よい」と回答。
- ・第1回+第3回結合データの統計分析においても変化は確認できなかった。

こども宅食の利用前と比較して、
お子さんの健康に変化はありましたか



変化あり
35% (n=253)

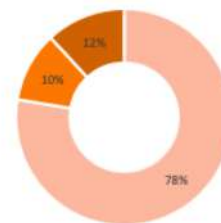


おやつや外食をがまんさせることが以前はあったが、今は少しだけできるようになった。

夕食をとる回数が増えて、おなかすいた、と言う回数が増えた。

(n=253 複数回答)

子どもの健康状態の変化
(第1回+第2回結合データ n=143)



●変わらない ●よくなった ●悪くなった

4-5 評価結果の詳細：中期アウトカム（2） 心身の健康状態の向上

精神状態は初期より変化が確認されている子どもの態度から、限定的ではあるがポジティブな変化が見られる（P.34再掲）

精神状態の改善

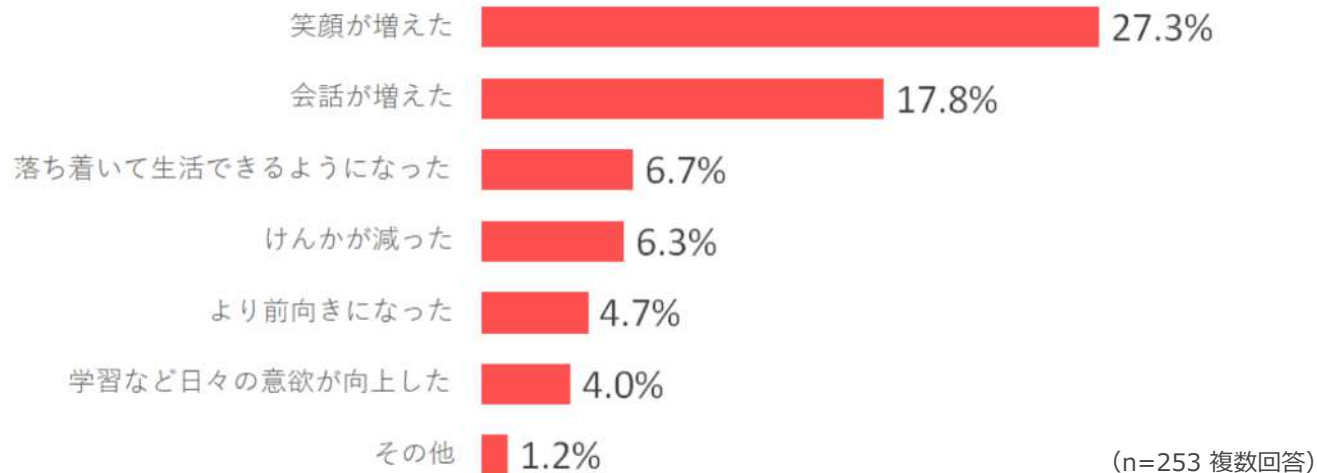
こども

こども宅食の利用前と比較して、お子さんの態度に変化はありましたか。



変化あり
45%

(n=253)



こども宅食でいただいたものについて、家族で話をした。
『これ、おいしいね』『どんなところが寄付してくださっているのか?』など、会話が増えた。

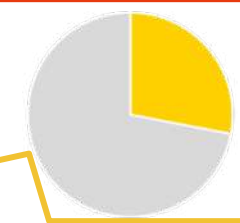
4-5 評価結果の詳細：中期アウトカム（3） 心身の健康状態の向上

健康面の変化においては「疲労感が減った」という人が最も多かったが、限定的な変化であった。精神面においては初期より変化がみられた。

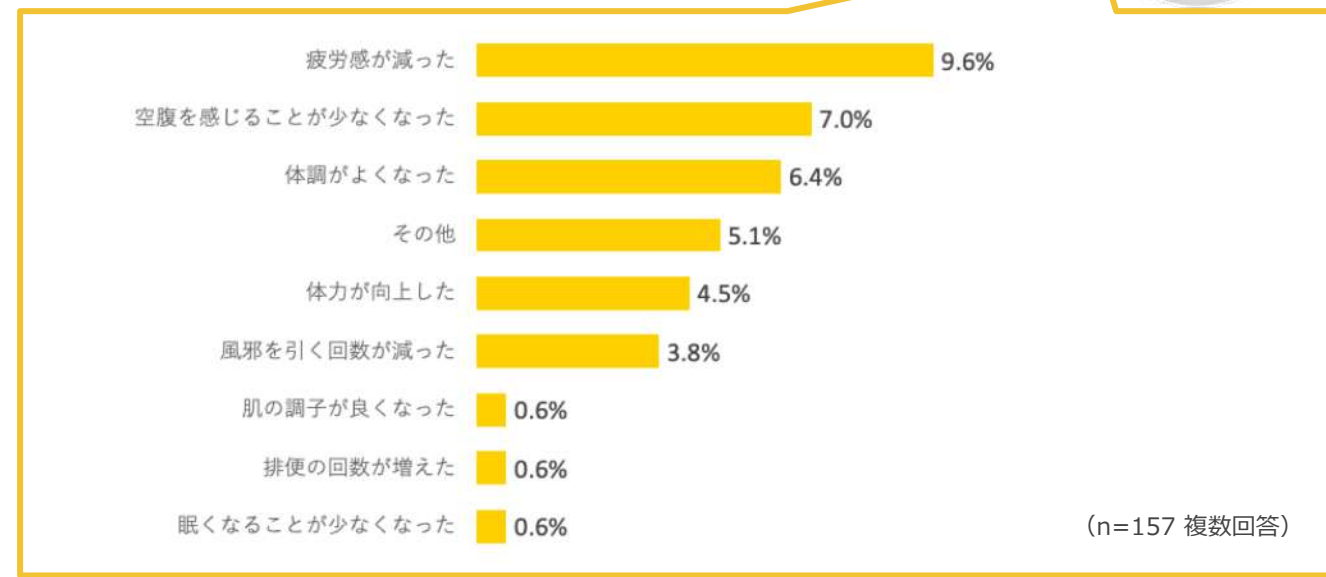
健康状態の改善

保護者

こども宅食の利用前と比較して、あなたの健康に変化はありましたか



変化あり
28%
(n=157)



精神面の改善

保護者

こども宅食の支援を受ける前と比較して、あなたの気持ちの変化はありましたか。

K6指標

詳細はP.32、33を参照

4-5 評価結果の詳細：中期アウトカム（4） 親子関係の改善

親子関係の改善は、親子で過ごす時間の分析からは確認されなかった。

親子関係の変化

保護者

あなたのご家庭では、お子さんと次のようなことをすることがありますか。

(1. めったにない 2. 月に1-2回 3. 週に1-2回 4. 週に3-4回 5. ほぼ毎日 6. 該当しない)

統計分析の結果、有意な変化はみられていない（「勉強をみる」はわずかに減少が見られるが、本プロジェクトとの関連はないと判断）

親子で過ごす時間の変化（第1回+第3回結合データ n=157）

項目	回答者数	平均値		平均値の差（第1回-第3回）	有意確率（両側）
		第1回	第3回		
勉強をみる	78	3.29	2.87	0.423	0.002
からだを動かして遊ぶ	74	1.88	1.92	-0.041	0.738
コンピューターゲームで遊ぶ	56	1.70	1.75	-0.054	0.695
カードゲームなどで遊ぶ	70	1.71	1.73	-0.014	0.905
学校や保育園の話をする	86	4.56	4.55	0.012	0.877
政治経済・社会問題の話をする	73	2.96	3.04	-0.082	0.548
テレビ番組の話をする	81	3.67	3.63	0.037	0.770
一緒に料理をする	74	1.99	2.05	-0.068	0.470
一緒に外出をする	85	2.94	2.91	0.035	0.657

1. めったにない=1点
2. 月に1-2回=2点
3. 週に1-2回=3点
4. 週に3-4回=4点
5. ほぼ毎日=5点

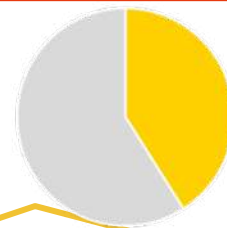
4-5 評価結果の詳細：中期アウトカム（5） 親子関係の改善

こども宅食利用前と比較して「家族との関係」が良くなったと回答したのは40%で親の気持ち、子どもの態度の変化が影響していると考えられる。

家族との関係

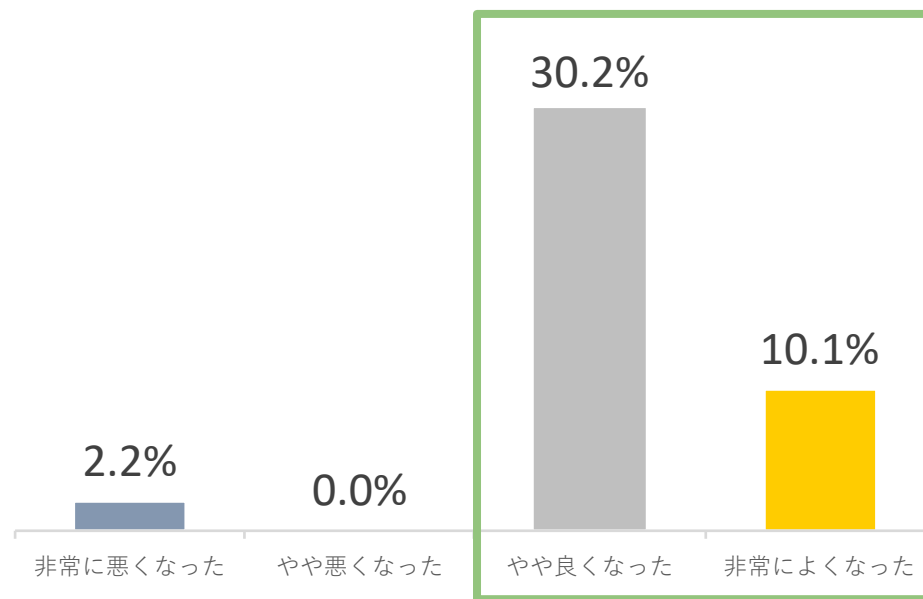
保護者

こども宅食の支援を受ける前と比較して、あなたと家族（こどもやパートナーなど）の関係に変化はありましたか？



良くなった
40%

(n=139)



(n=139 単一回答)

5. 課題と事業改善に向けた取り組み

5-1 ロジックモデルの改善（1）

活動

- 利用家庭の生活課題や支援ニーズを踏まえて、宅食という直接的な支援のみならず、専門的な支援への橋渡しによって家庭が困難な状況に陥ることを未然に防ぐ、潜在的なリスクをより早く察知するなどの予防的支援とそれに伴う活動内容の改善が必要である。

アウトプット

- 活動内容の増加、変更に伴い、アウトプットの項目、指標を変更していく必要がある。
- 初年度はアウトプットの目標値を設定していない項目が大半であったが（配送世帯数、配送食品の重量を除く）、2年目からは、評価結果の検証を行なった上で、目指すべき成果目標達成に必要なアウトプット目標値の設定が必要である。

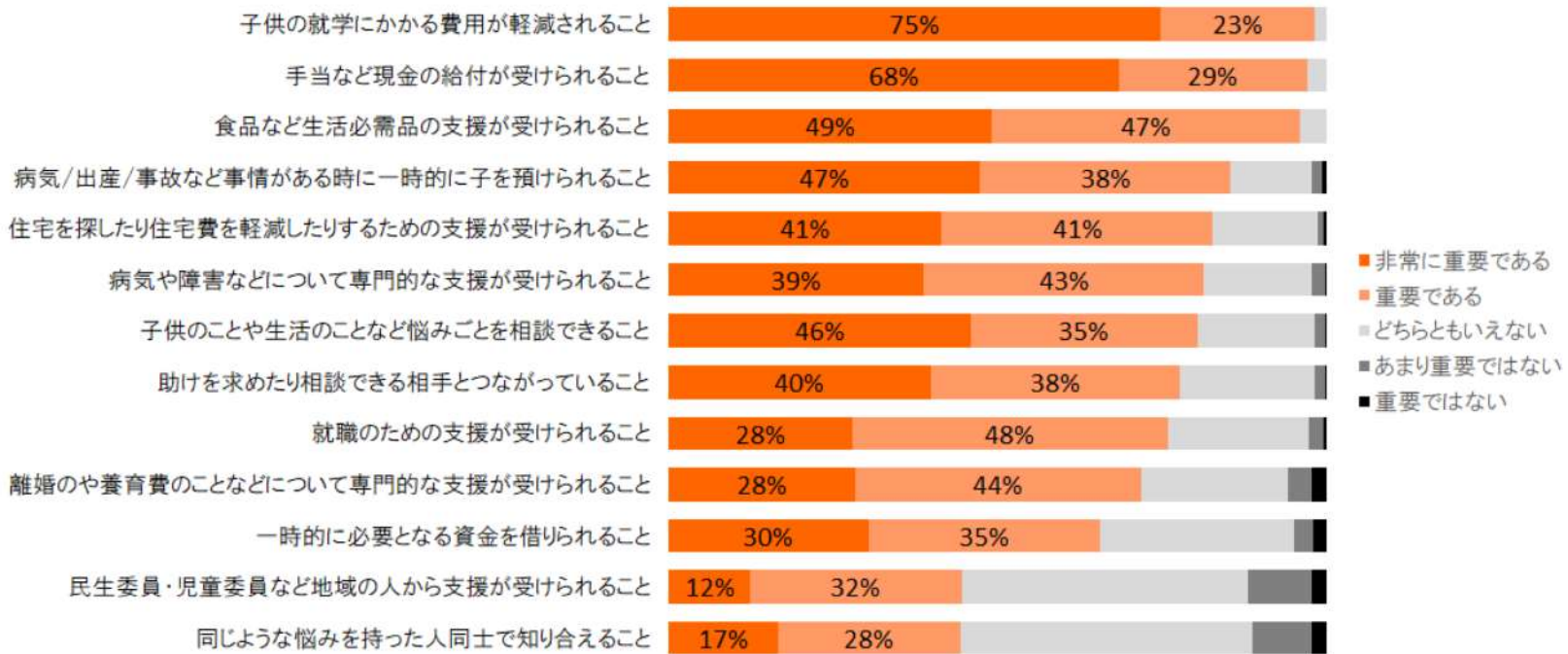
アウトカム

- 「食生活が豊かになる」「心理的ストレスが減少する」「可処分所得が向上する」については、想定したとおりの変化を測定することができた。一方で、「余剰時間が増加する」については、買い物に行く時間が減ったのか、調理の時間が減ったのか、現状では区別ができない。また、寄付食品の内容の影響を受けるため、指標の改善をコントロールするのが困難な現状もあるため、今後見直しが必要であると考えられる。
- 「心理的ストレス」と「心身の健康状態」のように、成果を初期、中期アウトカムで切り分けるのが困難なアウトカムは同一指標で測定しているが、アウトカム毎に変化が期待できる時期も異なるため、「初期」「中期」のような時間軸でのアウトカムの整理を見直す。
- 一つのアウトカムに複数の指標を設定しているものに関しては、総合的な判断に困難さを有するため、アウトカム毎に独立した指標を設定することを検討する。

5-1 ロジックモデルの改善（2）

本調査では、生活課題や支援ニーズを把握するためのアンケートも実施している。その結果も踏まえて、利用家庭が求めることをデータに基づいて見極め、支援内容や成果指標等の見直しを進める。

以下の支援はどの程度重要だと思いますか。（n=361*）



*第3回のアンケートに回答した第1期からの利用世帯（第2期解約世帯は除く）と、第2期新規利用世帯

5-2 評価項目の改善

例えば、今回の調査では、本事業開始時に抑うつ傾向がある保護者については、一部に1年後に抑うつ傾向の改善が見られた。このように対象を特定することで見えてくる成果があることが判明しており、評価項目の改善に役立てることを検討する。

K6指標による抑うつ傾向のある保護者の前後比較

		K6得点 (第3回アンケート)		
		非うつ (9点以下)	うつ (9点以上)	
K6得点 (第1回アンケート)	非うつ (9点以下)	度数	52	12
		%	81.3%	18.8%
	うつ (9点以上)	度数	7	13
		%	35.0%	65.0%
合計	度数	59	25	
	%	70.2%	29.8%	

評価結果についてはP.33を参照

K6指標：米国のKesslerらによって、うつ病・不安障害などの精神疾患をスクリーニングすることを目的として開発され、一般住民を対象とした調査で心理的ストレスを含む何からの精神的な問題の程度を表す指標として広く利用されている。日本語版の指標は本プロジェクトのアンケート票もしくは[こちら](#)を参照のこと。

5-3 測定方法の改善

実施形式

- 現在は手書き・郵送のアンケートとなっているが、今後は回答者の負担軽減、集計・分析作業の効率化の観点から、Webアンケート等の実施も検討していく必要がある。ただし、紙の方が回収率が高い、自由記述などの回答の記載が多いという可能性もあるため、形式については利用世帯へのニーズ調査をしてから決めていく必要がある。
- 対象者の選定には慎重さを有するが、より定性データを収集するためにはアンケート以外の調査も検討していく必要がある。
- 本事業による純粋なインパクトを測るためには、本事業開始当初に設定していた対照群の再設定が望ましい。

測定頻度

年に1回のアンケートになっているが、心理的ストレスのような項目は、年1回ではなく、配送時やLINE等で定期的に情報を収集した方が本来は変化を察知しやすい。一方で、「見えない支援」を継続するために、利用者の目線にたった頻度に設計し直す検討も必要である。項目と頻度の見直しは今後実施していく必要がある。

設問内容

仮説でアウトカムを多く設計したためアンケートの設問数が非常に多くなっており、回答負荷を下げるために量を減らしていく必要がある。また、利用世帯にとって聞かれたくない質問があるという声も一部頂いているため、量、質ともに今後修正をしていく必要がある。

5-4 マネジメントの改善および文化醸成

本来であれば以下のようなサイクルで事業を推進していく必要があるが、新規性が高い事業であり、事業を実施しながら計画を変更している状況である。そのため、事業推進と社会的インパクト・マネジメントをうまく組み合わせられていないという課題がある。また、このサイクルがうまく機能するには、インパクト・マネジメントを志向する組織文化の醸成が要諦であり、引き続きコンソーシアムにおいて醸成に向けた取り組みが必要である。

① 評価の実施

② 今後の事業の改善点、方向性の明確化

③ 事業計画の立案

④ 次年度予算の調整

⑤ 次年度評価モデルの見直し（④のインプットに応じた成果、指標、評価方法設計）

5-5 総評

阿部 彩

首都大学東京 人文社会学部 教授／子ども・若者貧困研究センター長

こども宅食プロジェクトは、事業の成果をきちんと把握しようとしている日本の中でも貴重な団体です。近年、NPO等の団体が社会的な課題を、自分たちで資金を集めて、解決していこうという取り組みが注目を浴びています。しかし、どのような事業であっても、いったん事業を始めると社会的責任が生じます。それは目的に賛同して資金協力してくれた市民に対する責任だけではありません。事業の対象となる人々に対しての責任でもあります。善意で始められる事業がすべてよい結果をもたらすわけではありません。「やること」が目的ではなく、「改善すること」が目的なのです。

評価をする。それは常に自身をクリティカルに見つめなおすことです。そこから、次の発展が生まれます。この姿勢をくずさない「こども宅食コンソーシアム」の活動に今後も大いに期待しています。

■参考資料：

- ・利用世帯への第3回アンケート票（新規世帯/継続世帯/解約世帯）
- ・こども宅食の対象世帯の生活実態と支援ニーズに関するアンケート【調査結果報告書】

本報告書に関する質問は認定NPO法人日本ファンドレイジング協会までお願いいたします。